慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴィデオ映像を用いた対人認知に関する基礎的研究
Sub Title	
Author	伊藤, 隆一(Ito, Ryuichi)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1991
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.32 (1991.)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	学事報告 : 学位授与者氏名及び論文題目 : 博士
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000032-0098

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

3) 分析対象および資料・文献。金君の論文は，労働組合の組織と機能とを，分離してではなく，統合的に理解して労働組合とその運動を評価していること，個別的な事例をバラバラにではなく主要な労働争議，広い事例に目を向けて総合的な分析・評価を試みている。鉄鋼大手などの労使関係の構造や制度の現実，歴史の分析に加えて，企業内少数派組合，労働者管理論，労働者文化論など従来の研究者によってもまだマイナーな位置しか付与されていない問題にも，きちんと目を向けていることは注目される。更に，金君はこの論文で実に数多くの文献・資料を広く渉猟しており詳細にわたる検討と紹介を試みていることも特記しておくべきことであろう。

4) 金勲君の真摯な研究態度と研究努力。金君がこれまでになした論文等の研究業績は必ずしも多くない。(1)「3・1 運動の社会学的考察—N・J・スメルサーの集合行動論を軸として—」(『延世社会学』1977年，第2号)，(2)「E・デュルケームの産業社会認識—道徳的個人主義を中心に—」(延世大学大学院論文，1982年)，(3)「1920年代植民地朝鮮における民族主義と社会主義—その分裂と対立の位相—」(国際基督教大学院修士論文，1984年)，(4)「紹介と批評；R. Bean, Comparative Industrial Relations: An Introduction to Cross-National Perspectives, 1985, 261 pp.」(『法学研究』1987年3月)，(5)訳出・「階級形成と社会的再生産」(J・ベルティング・他『国際比較調査の諸問題—社会科学における国際比較—』の第4章，1988年) などがこれまでの研究業績であり，そして今回の本論文も母国韓国における労働組合運動の現状や動向を視野に入れつつ，戦後日本の労使関係，労働組合運動に関するもので，金君は主として社会運動，労働運動を中心に少しずつ真摯に研究を進めてきたといえる。特に外国人留学生にとっての日本での研究環境はいまだに恵まれたものとはいえず，日本語による博士論文作成作業も決して易しいものではないと考える。こうした困難にもかかわらず，870字で380余頁におよぶ内容のある立派な論文を書き上げた金君の研究努力も大いに評価したい。

もちろん，いくつかの問題点も今後の課題として指摘しておかなければならない。

労使関係の制度化過程における労働組合機能の解明という本論文の中心的な問題設定においては，労働組合の役割・機能が現実的に労使の力関係により規定されてくるという指摘は適切ではあるが，労働組合，労働組合機能に視点が注がれ過ぎて，労使関係における労働組合の動きに対する使用者側・経営管理者側の支配・管理の動き，更に労働組合の内部的な組織（執行部，役員選出，構成，活動，組合員の具体的な活動や意識など）との関連が，相互に必ずしも全章を貫いて一貫して動態的に分析が加えられていない。これら三者の関連をもう少し掘り下げて考察を展開していけば，より動態的で説得的な分析になったのではないだろうか。

分析視覚，分析用具としている蚕食型と取引型，企業外在型と企業内在型の類型設定をめぐっては，類型・位相設定に至る背景やその方法論にももう少し言及されるべきであり，またその際に二分法に限らずそれらの中間の型なども考慮されるかもしれないのである。更に，労働組合論のうえでは，しばしば用いられている「企業別組合」と「企業内組合」という用語の概念使用上の予めの検討も極めて重要なことであり，同様に「場」や「労働者文化」等の用語についても，もう少し明確な定義をなしたうえで，活用していくことが望まれる。また，資料・文献の扱いにおいても，一次資料や二次資料等の差異や使用上の検討にも注意することも大切である。

今後とも自らの力量と一層の研鑽とによって，更に研究を深め，ますます発展させ，国際的な比較研究をも展開していくことを期待するものである。

(4) 結　論

以上みたように論じ足りない，いくつかの問題点，今後の課題も存しているとはいえ，金勲君の提出した本論文は，全体として労働組合運動論，特に労働組合機能論に焦点をあてて戦後日本の労使関係の歴史的展開を明らかにした意欲的な，しかも秀れた研究論文であると評価されるものであり，ひとりの自立の研究者としての力量を十分に示すものである。よって，われわれ審査員は，金勲君に社会学博士（慶應義塾大学）（課程博士）の学位を授与することが適当である，と判断するものである。

社会学博士

乙　第2272号　伊　藤　隆　一

ヴィデオ映像を用いた対人認知に関する基礎的研究

〔論文審査担当者〕

主査　槇　田　　仁（慶應義塾大学文学部教授
社会学研究科委員
文学博士）

副査　岩　男　寿美子（慶應義塾大学新聞研究所教授
社会学研究科委員
Ph. D.）

副査　梅　津　耕　作（埼玉大学教育学部教授）
学力確認担当者
岩　男　寿美子（慶應義塾大学新聞研究所教授
社会学研究科委員
Ph. D.）
大　淵　英　雄（慶應義塾大学文学部教授
社会学研究科委員
社会学博士）

内容の要旨

当研究は，Heider が，素朴心理学の体系と言い，Kretschmer が，大衆観念の沈殿物，あるいは民族心理学的記録と述べた，一般の人々が持っている対人認知（印象形成）における信念の体系（implicit personality theory；以下，IPT と略す）について，実証的に明らかにしていこうとするものである。具体的には，体質心理学の知見を用いて研究に用いる刺激人物（stimulus person；以下，SP と略す）を選定し，SP のヴィデオ映像を用いていくつかの対人認知実験を行い，対人認知の基礎的な枠組みについて検討していくことにした。

当論文は，理論編，実験編，資料編，そしていくつかの付帯する資料からなっている。

理論編の4つの章では，対人認知（印象形成）研究の史的瞥見と当研究の研究指針について述べた。

実験編の9つの章では，実験に用いた SP の選定と刺激の製作，6つの実験の目的・方法・結果・考察などについて順次述べ，最後に研究成果をまとめた。

資料編には，実験に用いた刺激や用紙のコピー，基礎的なデータなど，実験編に掲載するのはやや煩雑であるが，除くことのできない資料を一括して掲載した。

付帯資料は，実験に用いた SP のヴィデオテープ，写真である。

当研究では，従来の対人認知研究の史的瞥見，対人認知研究の課題の検討を踏まえて，研究の目的と仮説を立て，それを理論編第4章に次のようにまとめた。

(1) はじめて他者と接した時，我々はその他者に対してさまざまな印象を作り上げる。こうしたいわゆる第一印象は，どのような枠組みになっているのか。また，第一印象の正確さはどの程度のものなのか。このような疑問を実証的に解明していくことを目標に，対人認知（印象形成）に関する実験的研究を行う。

(2) 当研究では，従来の対人認知研究の問題点を点検し，新たな対人認知の枠組みの構築をめざす。

(3) SP 選択の基準として，Kretschmer や Sheldon の体質心理学の体系を導入する。

(4) SP は，できるだけ，いろいろな属性の差異をカバーするような形で選択する。気質・体質条件を SP 選択の基準とするだけでなく，中年男性，青年男性，青年女性と，性・年齢条件の異なる SP を用意する。SP のその他の属性に関する情報もあらかじめ収集しておき，SP のクラスターを説明するための変数として利用する。

(5) SP についてのコントロールは実質的に (3)・(4) で述べた2条件のみとし，ほとんど自由な表出を保証したヴィデオ映像を刺激とする。ヴィデオ映像の有効性を検討するために，コントロール条件として，動きの見られない写真刺激を用意する。

(6) 次元性の検討に際しては，外観の印象と内面の印象を同質の指標として扱う。印象評定にはチェックリストを用いる。ただし評価項目には，評価者の自由記述を内容分析し，整理したものを使用する。

(7) チェックリストの評価データを因子分析して，評価者に共通な IPT の枠組み（対人認知の次元）を明らかにする。それは，外観から内面まで，SP の広い領域の属性を含むものになるはずである。

(8) 実験を繰り返しながら，対人認知次元がクリアに抽出されるように，チェックリスト項目を整理していく。

(9) 最終的に，体質心理学の内容に沿った評価の次元が抽出され，あるいは，SP が体質心理学の内容に沿った形で類型化できれば，対人認知の研究領域だけでなく，体質心理学に対しても，あらたな知見を提供することができよう。

実験編では，まず，SP の選定と刺激の製作，および，第Ⅰ予備実験から第3実験まで合計6つの実験について述べた。

第6章では，SP の選定と刺激の製作について報告した。3つの予備実験では，いずれも 10 名（うち1名は練習用）のヴィデオ SP を用いた。3つの本実験すなわち第1実験～第3実験では 55 名ないし 46 名（うち1名は練習用）のヴィデオ SP を用いた。また，第1実験では，統制用に，25 名（うち1名は練習用）の写真刺激も使用した。第6章では，これらの SP の選択基準や，ヴィデオ映像，写真の具体的内容などについて述べた。

次の3つの章では，3つの予備実験について報告した。

第7章では，第Ⅰ予備実験の内容について述べた。槇田・槇田（1971）の顔写真を刺激とした実験と同一の対人認知チェックリストを用いて，SP 9 名のヴィデオ映

像を評価し，対人認知研究の道具としてのヴィデオ映像の有効性について検討した。

第8章では，感度実験について報告した。第Ⅰ予備実験のデータに評価者のパーソナリティ（気質の3類型）要因を加え，ヴィデオ映像を用いた対人認知事態における評価者の感度の問題について検討した。

第9章では，第Ⅱ予備実験について報告した。SP 9名のヴィデオ映像を用いて，25名の評価者に SP の外観・内面の印象の自由記述を求めた。収集した記述を整理して，評価項目のカテゴリーから対人認知の内容を推測し，また，第1実験に使用するチェックリスト (1) を作成した。

第10章以降の3つの章が，本実験についての報告である。

第10章では，第1実験について述べた。第Ⅱ予備実験で作成された65項目のチェックリスト (1) を用いて，複数の評価者に54名のヴィデオ映像と24名の写真に対する印象評定を行わせた。データを分散分析や主成分分析にかけて，チェックリスト項目の分析・整理や対人認知の次元性の予備的な検討を行った。同時に，対人認知研究の刺激材料としての，ヴィデオ映像と写真との違いを比較・検討した。

第11章では，第2実験について報告した。第1実験で作成されたチェックリスト (2) を用いて，複数の評価者に45名のヴィデオ映像の印象評定を行わせた。データを因子分析にかけて，対人認知の基本次元の抽出を試みた。また，基本次元の中で SP がどんなクラスターに分類されるか，検討した。

第12章では，第3実験について報告した。最終的に整理された33項目のチェックリスト (3) を用いて，複数の評価者に45名のヴィデオ映像の印象評定を行わせ，第2実験までの研究成果の再検討・確認を行った。

以上の実験から得られた知見を踏まえて，最後の第13章では，研究成果のまとめと考察などについて述べた。

以下，当研究で得られた成果や提起された問題点などについて述べていくことにする。

その第1は，対人認知刺激としてのヴィデオ映像の有効性の問題である。当研究では，刺激としてヴィデオ映像を使用した。また，第1実験では，写真を SP とした統制実験もあわせて行って，間接的な対人認知研究用刺激としてのヴィデオ映像の有効性について検討した。当研究結果では，ヴィデオ映像を刺激とした場合，写真に比べて，評価者間で SP の広い範囲の印象が一致しやすいようであった。写真を刺激とした実験においては，印象が一致しやすい項目は身体に関するものが中心であった。それに比べてヴィデオ映像は，身体のみならず，行動・表情，性格といった広範囲の印象を一致させやすいようであった。これは，ヴィデオ映像が，SP の広い範囲の印象を明確に捉えやすい刺激であること，捉えた印象を評価者間に共通な IPT の枠組みの中に組み込みやすい刺激であることを物語っているように思えた。

先立つ研究においても，非言語的な手がかりの多さ，多様さに対応して，コミュニケーション・メディアや記憶材料としてのヴィデオ映像や映画の有効性が強調されている。直接目の前にいる人物の印象と，間接的な方法によって提示された人物の印象との間には，違いがあるようであるが，ヴィデオ映像は，対人認知研究の刺激としては間接的な材料であるが，その中では，現実の人物にかなり近い情報の質と量を持っている刺激ということができるかもしれない。

第2は，対人認知の次元性の問題である。対人認知の枠組みを構成するカテゴリーは，「身体」「行動・表情」「性格」「能力」「評価」「生活」のようなものであった。このうち，出現頻度の高い「身体」「行動・表情」「性格」カテゴリーに関して，当研究では，「力本性」「肉づき，体力」「気取り，冷淡さ」「おっとりさ，人のよさ，もの静かさ」「姿勢，物腰，落ちつき」「背の高さ，身体各部の細長さ」という6因子が抽出された。

当研究で得られた対人認知の枠組みは，ほぼ一般的，共通的な枠組みと考えてよいものである。しかし，1人1人の評価者が持つ対人認知の次元は，一般的な対人認知の次元数を越えて，かなりの数にのぼる可能性がある。こうした個人的な対人認知の枠組みを探ることも，今後の対人認知研究の課題の1つといえるが，個人的な対人認知の次元と共通次元とを比較したり結びつけたりすることは，方法論的に難しいようで，いまだ決定的な報告は出されていない。

第3は，捉えられた被認知者像の中身の問題である。当研究では，抽出された6次元（因子）の中のばらつきのかなりの程度は，目的・仮説の(3)(4)に述べた SP の2要因で説明がついた。また，そうした認知像の中に，Kretschmer•Sheldon の体質心理学の知見に類似した，身体，行動・表情，性格相互の関連性が見いだされた。さらに，個々の項目ごとのデータをみていくと，気質要因では，行動・表情，性格カテゴリーに属する項目よりも，身体項目で，SP がよく類型化されることがわかった。

残念なことに，性格認知の次元性に関して検討した，先立つ研究の中で，SP の類型化について言及している研究は1つも存在しない。他の次元性研究では，SP はどんな具合にグルーピングされていたのであろうか。著者には非常に興味ある問題であるが，資料はまったくない。

当研究では，一般の人々の間にも，対人認知（IPT）の基準として，Kretschmer・Sheldon の3類型の内容に類似した枠組みが存在することを推測させるデータが得られた。もちろんその内容は，実際の体質と気質の関連そのままではない。単純化・平明化された体質・気質の関連に，「大衆観念の沈澱物」が加わったもののようであった。しかし，そうした IPT の枠組みを用いて，評価者が，身体，行動・表情，性格に関する印象を総合して，SP を Kretschmer・Sheldon の3類型に近い形に類型化している可能性が示唆された。Kretschmer が答えを出さずに残した大衆観念の沈澱物は，現実に一般の人々の心の中に IPT の枠組みの一部として存在しているようであった。

最後に，当論文の構成は，概略，以下の通りである。

〔理論編〕
第1章　はじめに
第2章　対人認知あるいは印象形成
2—1.　Asch の研究
2—2.　対人認知のプロセスに関する研究
2—3.　対人認知の構造に関する研究
2—3—1.　Asch の研究に対する批判
2—3—2.　対人認知の次元性に関する研究
2—3—3.　性格認知の次元性に関する研究
2—3—4.　対人認知における手がかりの優位性に関する研究
第3章　対人認知研究の課題と体質心理学
3—1.　ヴィデオ映像を SP として用いること
3—2.　SP として適切なヴィデオ映像の内容，および行動の表出的側面
3—3.　評価項目としてのパーソナリティ特性の内容
3—4.　対人認知次元と性格認知次元，および Kretschmer・Sheldon の体質心理学
第4章　研究の目的と仮説
〔実験編〕
第5章　実験の概要
第6章　刺激人物（SP）の選定と刺激の製作
6—1.　1回目のヴィデオ用SPの選定と刺激の製作
6—2.　2回目のヴィデオ用SPの選定と刺激の製作
6—3.　写真用 SP の選定と刺激の整作
6—4.　刺激の提出——付帯資料
第7章　第Ⅰ予備実験——ヴィデオ映像の有効性の検討
第8章　感度実験——評価者の感度の問題の検討
第9章　第Ⅱ予備実験——チェックリスト(1)の作成
第10章　第1実験
10—1.　目　的
10—2.　方　法
10—3.　結果・考察
10—3—1.　項目評定平均値の検討
10—3—2.　多変量解析データの検討
10—3—3.　刺激としてのヴィデオ映像と写真の比較
10—3—4.　チェックリスト(2)の作成
第11章　第2実験
11—1.　目　的
11—2.　方　法
11—3.　結果・考察
11—3—1.　項目評定平均値の検討
11—3—2.　多変量解析データの検討
11—3—3.　チェックリスト(3)の作成
第12章　第3実験
12—1.　目　的
12—2.　方　法
12—3　結果・考察
12—3—1.　項目評定平均値の検討
12—3—2.　多変量解析データの検討
12—3—3.　次元性と SP の類型化の再確認
第13章　研究のまとめと考察
13—1.　実験の要約
13—2.　課題と結論・考察
13—2—1.　対人認知刺激としてのヴィデオ映像
13—2—2.　対人認知の内容（枠組み）
13—2—3.　身体，行動表情，性格認知の次元
13—2—4.　SP の類型化と体質心理学
13—2—5.　対人認知研究の展望
引用文献
〔資料編〕

論文審査の要旨

伊藤隆一君より提出された学位請求論文『ヴィデオ映像を用いた対人認知に関する基礎的研究』は，個人が他者を把握しようとする際に用いる心理的枠組みについ

て，ヴィデオ映像を刺激として，実証的に論じた労作である。

当論文は，「理論編」「実験編」「資料編」，そして「付帯資料」から成っている。「理論編」の4つの章では，対人認知研究の史的瞥見と当研究の研究指針が述べられている。「実験編」の9つの章では，実験に用いられた刺激人物 (stimulus person; 以下 SP と略す) の選定と刺激の製作，6 つの実験の内容，最終的な研究成果が述べられている。「資料編」は，実験に用いられた刺激やチェックリストなどの資料，「付帯資料」は実際に実験に使用されたヴィデオテープ，写真である。

「理論編」で著者が述べている問題意識と研究指針は次のように要約できる。

1. 人間は，他者と接した時，しばしば相手を認知・理解しようとする動機を持つ。個人のさまざまな属性や心理過程を知ろうとするこのような働きを，対人認知あるいは印象形成という。人間は一般に，自らの人生体験から人間のパーソナリティというものについての素朴な信念の体系を持っており，これに基づいて，ある程度限られた手がかりから他者の全体的印象を形成しようとする。こうした体系は，一般に「暗黙のパーソナリティ仮説 (implicit personality theory; 以下 IPT と略す)」と言われている。対人認知に関する研究領域では，最近，複数の次元からなる認知空間を対人認知あるいは IPT の枠組みとして捉え，そこにみられる構造的特質の理解をめざした研究，すなわち対人認知の次元性の研究が数多く行われている。

2. しかし，これらの研究で抽出された諸次元にはあまり類似性・統一性がみられない。その原因は以下のような諸点に集約されよう。

1) 対人認知の次元性に関する研究が性格認知，表情認知といったいくつかの領域に細分化され，SP の広い属性を取り扱った包括的な研究があまり行われてこなかったこと。

2) SP の内容が，初対面の人物，顔写真，漫画のキャラクター，文章による人格のイラスト等と多岐にわたり，それぞれ捉えている SP の属性が異なるように思われること。

3) 多様な SP を効果的に選択できるような手続き，SP の自然な行動を観察可能にするような手続き等，SP の多様な個人差の観察を保証する手段があまり講じられてこなかったこと。

4) 次元を構成するための評定尺度項目が研究者ごとにかなり恣意的に決定されてきたこと。

3. そこで，2 に述べたような問題点について考慮しながら，以下のような仮説と方略を立てて，対人認知の次元性に関する実験的研究を行うことにした。

1) SP 選択の基準として，気質・体質条件と性・年齢条件という2条件を導入し，SP の多様性を保証する。気質・体質条件としては，Kretschmer や Sheldon らの体質心理学の体系を導入し，分裂型 (S)・循環型 (Z)・粘着型 (E) という3タイプの SP を用意する。性・年齢条件では，中年男性 (MM)・青年男性 (YM)・青年女性 (YF) という3種類の SP を用意する。SP のその他の属性に関する情報もあらかじめ収集しておき，SP のクラスターを説明するための変数として利用する。

2) SP のコントロールは 1) で述べた2条件のみとし，SP のほとんど自由な表出を保証した，ある面接場面のヴィデオ映像を刺激として用いる。

3) SP の外観の印象と内面の印象を同質の指標として扱い，広範囲の属性を包含するような対人認知の次元性について検討していくことにする。

4) 印象評定のためのチェックリストを構成する評定尺度項目は，評価者の自由記述を内容分析して作成し，段階的に見直していく。

5) チェックリストの評定データを多変量解析にかけて，評価者に共通な対人認知の次元 (IPT の枠組み) を明らかにしていく。

6) 抽出された次元をもとに，SP がどのような形で類型化されるか検討する。

以上のような視点に立って，著者は「実験編」にまとめられた一連の実験を行っている。順次その概要を述べていく。

《SP の選定と刺激の製作》 SP 10 名の映像を順に提示するヴィデオテープを，7 セット作った。内訳は，予備実験用のものが1セット，本実験用のものが6セットである。各セットに収録された SP は，S・Z・E という気質・体質条件の3タイプ，MM・YM・YF という性・年齢条件の3タイプの組合せ，すなわち 3×3 のマトリックスの各セルに1名ずつ，都合9名の SP に，各セット共通の練習用の SP 1 名を加えた 10 名である。また，第1実験の統制実験用に，25 名（うち1名は練習用）の写真刺激も作成した。予備実験用ヴィデオ SP と写真 SP は，ほぼ本実験用ヴィデオ SP の中から選択されている。

収録されたヴィデオ映像は，原則として，MM 群の SP を面接者，他の SP を被面接者とする面接場面のも

のであるが，SP の会話内容，服装などには何の統制も加えていない。ただし，青年 SP は概ね大学生，中年 SP は全員スーツを着用した会社員である。第1実験に使用された写真刺激は，各 SP ごとに，正面全身像や面接中のスナップ写真を数枚台紙に貼ったものである。

《3 つの予備実験》 本実験に先立ち，3 つの予備実験を実施した。

まず，第1予備実験では，先立つ対人認知研究において使用された対人認知チェックリストを用いて，SP 9 名のヴィデオ映像を評価する実験を行い，対人認知研究の道具としてのヴィデオ映像の有効性について肯定的な結果を得た。

次の感度実験では，対人認知事態における評価者の感度の問題を検討した。第Ⅰ予備実験のデータに評価者のパーソナリティ（気質の3類型）要因を組み合わせ，評価者の気質が対人認知の正確さにどのように影響するか考察したが，結果は両者の間にあまり関連性を見いだせなかった。

最後の第Ⅱ予備実験では，本実験に使用するチェックリストの作成を行った。25 名の評価者に SP 9 名のヴィデオ映像を見せ，外観・内面の印象の自由記述を求めた。収集した約 3,500 の記述を整理して，SP の身体，行動・表情，性格を印象評定するための，65 項目のチェックリスト(1)を作成した。

《第1実験》 第1実験から第3実験まで3つの本実験では，ヴィデオ映像を刺激とする対人認知事態において，評価者がどのような認知次元（IPT の枠組み）を持ち，使用しているのか，対人認知の次元性に焦点を当てて実験を行った。まず第1実験では，複数の評価者に 54 名のヴィデオ映像と 24 名の写真を見せ，チェックリスト (1) を用いて印象評定を行わせた。データを分散分析や主成分分析にかけて，チェックリスト項目の分析・整理や対人認知の次元性の予備的な検討を行った。また，刺激材料のヴィデオ映像と写真とを比較して，ヴィデオ映像が写真よりも広範囲の属性についての情報を提供し，より実際の人物に近い刺激と考えることができることを明らかにした。

《第2実験》 第1実験の結果から作成されたチェックリスト (2) を用いて，第1実験と同様の方法で，複数の評価者に 45 名のヴィデオ映像の印象評定を行わせた。データを因子分析にかけて，認知次元の抽出を試みた。また，抽出された次元の中で SP がどんなクラスターに類型化されるか，検討した。

《第3実験》 第2実験の結果により最終的に整理された 33 項目のチェックリスト (3) を用いて，複数の評価者に 45 名のヴィデオ映像の印象評定を行わせ，第1実験，第2実験の研究成果の再検討・確認を行った。

《研究成果のまとめ》「実験編」では最後に，一連の実験から得られた研究成果のまとめを行っている。要約すれば，以下のようなものになろう。

1) 評価者が持っている対人認知の基本次元（身体，行動・表情，性格認知の次元）は以下のような次元と推定された。

第1次元：『力本性の次元』……生き生きとした生命力，明るさ，活動性，エネルギー，力強さを合わせたような次元

第2次元：『肉づきや体力の次元』

第3次元：『気取りや冷たさの次元』

第4次元：『おっとりさ，人のよさの次元』

第5次元：『姿勢のよさ，礼儀正しさ，落ちつきの次元』

第6次元：『背の高さや身体各部の細長さの次元』

2) 上の基本6次元は気質要因や性・年齢要因をそのままあらわしているものではなかったが，複数の次元を組み合わせることにより，気質，性・年齢といった属性の個人差をうまく表現することができるようであった。

3) 評価者は，基本6次元すべての情報を用いて，SP を，気質，すなわち，Kretschmer・Sheldon の 3 類型を基準として類型化しているようであった。

4) 同時に，当研究では，認知次元の中に，体質心理学における体質と気質の関連とは異なる相貌・行動と気質の関連をいくつか見いだすことができた。例えば，『力本性の次元』の中に見られた Z と E の特性の混乱の問題，印象評定で SP の体格を最もうまく区別できる項目が「首の長さ」と「首の太さ」であったこと，さらに，「太って」いても「がっしり」していても共に肉づきがよく印象評定されることなどである。

以上のように，当論文は，対人認知の問題について，基礎的な部分から洗い直しを行い，新たな枠組みの構築を試みた力作である。当論文は以下のような諸点で評価すべきものがあるように思われる。

1. 包括的・非人工的・実証的対人認知研究としての意味：著者は，現実の対人認知事態に可能な限り近い，包括的・非人工的・実証的な対人認知研究に長年月取り組んで来た。その目論見は当論文の中に概ね結実しており，長い間の著者の努力を多としたい。

2. 個人の広範囲の属性を包含する対人認知の基本次元を見いだした点：当研究で導出された次元1つ1つは

必ずしも新しいものではない。例えば，第1次元は従来の性格認知の次元性研究の中でよく見られる次元である。また，2つの身体次元（第2，第6次元）は，Kretschmer の共同研究者である Schick が身体計測データを因子分析して求めた5因子中の第1，第2因子に一致している。しかしながら，このような一致はむしろ当研究の妥当性を裏付けるものといえる。ヴィデオ映像という新し刺激材料を用いて，過去の研究成果を統合し，個人の広範囲の属性を包含する包括的な基本次元を見いだした点は高く評価される。

3. 対人認知の次元性研究にはじめて SP の個人差の視点を導入した点：従来の次元性研究においては，個人が共通に持っている対人認知の基本次元（共通な IPT の枠組み）の抽出のみが課題として取り上げられてきた。当研究は，あらかじめ SP のさまざまな属性を把握しておくことにより，基本次元の中で SP 1人1人のさまざまな属性がどのように捉えられているかをはじめて明らかにしたものである。

4. 体質心理学への貢献：著者は，6つの対人認知の基本次元の中で，SP が概ね Kretschmer・Sheldon の体質心理学の枠組みを基準として類型化され，分類されることを示した。対人認知の枠組みの中に，体質心理学の体質と気質の関連と類似の構造が存在していることを明らかにしたことは，対人認知研究と体質心理学を結ぶ接点を提供した点で貴重な研究といえる。

もちろん，当論文には以下のような問題点を指摘することができる。

1. 引用文献の内容や論文中の用語の扱いに一部不十分な箇所がみられる。

2. また，曖昧な表現が散見される。

3. さらに，論文の書き方が冗長であり，また厳密さを意図したためであろうが，実験ごとに記述が繰り返され，不必要に長くなっている所がみられる。

4. 結果の解釈において，例えば，分散分析の結果，ヴィデオの方が写真より一致度が高いのは写真刺激のコントロールが悪いことを反映している可能性があるが，そうした検討が成されていない。

等の点である。

しかしそうした点を勘案しても，著者が，対人認知の次元性研究に新たな視点から緻密な方法を用いて取り組み，示唆に富む成果をあげたことは評価できる。よって，著者は，当論文により，社会学博士の学位を授与されるに値するものと認められる。